

I-1

学園創立者 清水安三・美穂・郁子
清水安三

若き日の清水安三

清水安三は、1891年6月1日、滋賀県の現 高島市に生まれた。江戸時代の陽明学者 中江藤樹と同郷である。清水は、中学に入学してまもない1905年、英語教員としてアメリカから来日していたW. M. ヴォーリス (1880-1964) と出会い、そのバイブルクラスで基督教に接した。ヴォーリスはほどなく教員を辞して、建築業に転じるとともに、近江ミッションを組織して、基督教伝道に打ち込んだ。1908年、清水は基督教(組合派)の洗礼を受け、10年に京都の同志社に入学した。同志社は新島襄の開設した学校である。清水は近江ミッションとも連携しつつ伝道活動にしたいが、その機関誌『湖畔の声』にも寄稿するようになった。この近江ミッション人脈と同志社人脈は、清水の活動の重要な背景を形成した。同志社卒業後、組合派機関紙『基督教世界』の発行元である基督教世界社で働き、一年志願兵となった時期もある。清水は同志社在学中から日中関係に強い関心をいだき、中国に渡る道を模索していた。



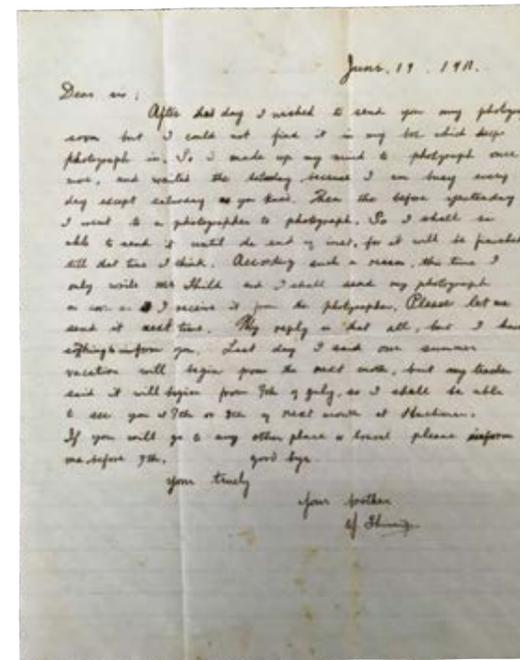
■ 膳所中学時代
YMCAのヴォランティアボーイ時。
(The Omi Mustard Seed, 1911年11月号より)



■ 清水安三・生家
清水安三は滋賀県の現 高島市で誕生。



■ W. M. ヴォーリス (1905年来日の頃)
滋賀県立第二中学校(膳所中学校)入学後間もない清水を基督教信仰に導き、その後も支援した。



■ 清水安三からヴォーリス宛書簡 (1911年6月19日付)
当時、安三は同志社の学生。ヴォーリスとの間の交流がうかがえる。
(近江兄弟社社史資料室所蔵)



■ 『湖畔の声』(近江ミッション機関誌) 1929年4月号表紙
『湖畔の声』には、清水もしばしば寄稿した。



■ 志願兵時代 (1916年頃)
歩兵第9連隊(在大津)に「一年志願兵」として入隊した。



■ 近江ミッションメンバー (1910年代初め頃)
左から3人目・清水、右から4人目・吉田悦蔵、3人目・武田猪平(美穂に洗礼を受けた牧師)、右端・ヴォーリス。



■ 同志社卒業時 (1915年)
前列右端が清水安三。卒業論文を手にしている。

I-1

学園創立者 清水安三・美穂・郁子
清水安三

学校設立へ

清水は、1917年6月、組合教会の伝道師として「満州」に渡り、同志社の学生時代に彦根教会で出会っていた横田美穂と翌18年5月に結婚式をあげた。その後、1919年3月、五四運動前夜の北京に移り、中国語の習得に励んだ。1920年に華北地域が干ばつによる飢饉に見舞われたとき、日本からの救援活動もおこり、清水はそれと歩調を合わせ、21年には北京の「災童収容所」を拠点に救援活動を展開した。

清水はそれまでも小規模な教育活動をしていたとも思われるが、彼はこの救援活動終了後に、一定の寄付金を得て、貧困な生活を強いられていた女子児童のために、1921年5月28日、朝陽門外に崇貞学校（あるいは崇貞工読学校）を開設した。これが次第に整備され、のちに崇貞学園と称することになる。「工読」とは、女子児童に手工技術（主に刺繍）と読み書きを教えるというもので、J.F.オーバリンやJ.デューイの教育思想に連なるものであり、賀川豊彦の影響も作用していた。刺繍を教えるうえで、美穂の功績は大きかった。



■瀋陽基督教會前
1917年、清水安三は組合教会から中国に伝道師として派遣された。

華北の飢饉への義援金呼びかけ

華北飢饉の情報に接した日本では、その救援活動を「日華実業協会」（渋沢栄一会長）が開始し、義援金募集の呼びかけ（1920年11月10日）をおこなった。救援活動は1921年前半を中心に展開され、清水も現地でその一翼を担った。清水は学校設立の前提に、この飢饉救援運動をあげているが、そうであれば、学校設立が1921年春以降であることには議論の余地がない。



■義援金を呼びかける新聞広告
（『朝日新聞』1920年11月14日付）



■北京教会（1922年頃）
前列中央に清水安三、3列目左から3人目が美穂、隣は長男泰2歳頃。

清水の教育思想に影響を与えた人びと



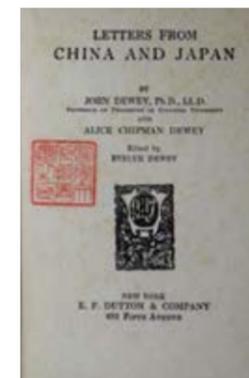
■新島襄
新島襄（1843-90）は、キリスト教の教育者。1875年京都に同志社英学校（現同志社大学）を開設。（同志社大学同志社史資料センター提供）



■学内に置かれた中江藤樹像
陽明学者中江藤樹は、清水と同じく滋賀県高島出身。像の下に「致良知」という王陽明の思想を示す文字を刻んだプレートがある。



■賀川豊彦『死線を越えて』表紙
賀川と清水は北京で出会い、交流を続けた。この本は大正期の大ベストセラー。（改造社、1920年）



■J. デューイ『中国と日本からの手紙』原書
清水は北京でデューイ講演を聞き、その教育思想に影響を受けた。（E. P. Dutton & Company, 1920年／国際交流基金ライブラリー所蔵）



■J. F. オーベルラン（Oberlin）
アルザスの牧師・社会事業家。児童学校を創設。米国のオーバリン大学はこの名に由来。



■J. H. ベスタロッチ
スイスの教育実践家。この胸像と「教育の本質は愛である」という言葉のプレートが桜美林大学構内に併置されている。

I-1

学園創立者 清水安三・美穂・郁子
清水安三

ジャーナリストとして

清水は、中国に渡る直前、大阪朝日新聞社で長谷川^{にょげかん}如是閑社会部長と面識を得ていた。如是閑は、大正期のデモクラットにしてジャーナリストであり、1919年から雑誌『我等』を主宰していた。清水はこの『我等』にしばしば寄稿し、また『大正日日新聞』などに寄せた清水の五四運動論は、吉野作造の注目するところとなった。こうして、清水は『読売新聞』や邦字週刊誌『北京週報』などでも精力的に中国論を展開した。清水のジャーナリスト的な側面が光彩を放った時期である。

清水の中国論の強みは、北京で中国人たちとの交流があったことと関連しているが、交流した中国人には魯迅や周作人もいた。また、日本人有力者たちの北京訪問時には、その案内役を担当することがあった。その有力者のひとりに倉敷紡績社長の大原孫三郎がいて、その大原の援助を受けることで、アメリカ・オハイオ州にあるオーバリン(Oberlin) 大学への留学の道が開け、2年に及ぶ留学(1924-26)を果たしたのだった。



■魯迅とエロシエンコ
清水はこの二人の文学者と北京で交流があった。(『ワシリイ・エロシエンコ作品集2:日本追放記』(みすず書房、1974年出版)より)



■如石「周三人」(『読売新聞』1921年11月24日付)
如石は清水の筆名。「周三人」とは、魯迅・周作人・周建人の3人兄弟のこと。清水は1922年頃、北京に住んでいた作家の魯迅・周作人の兄弟、ロシア人作家で盲人のエロシエンコと親交をもった。当時の『魯迅日記』『周作人日記』にも、清水の名前が登場する。また、清水は、エスペランティストでもあったエロシエンコの助力をし、その作品が雑誌『我等』に掲載されるよう尽力した。この記事は魯迅の日本への紹介としては先駆的。



■清水の寄稿した雑誌『我等』(1923年3月号)
長谷川如是閑らが主宰した民主的編集方針の雑誌。



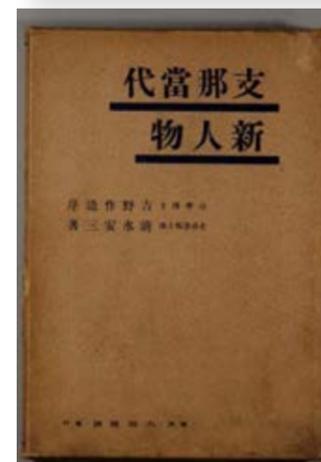
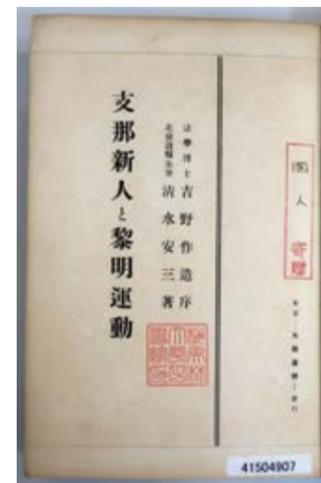
■長谷川如是閑
清水は中国行きに際し、朝日新聞社で長谷川社会部長と出会った。



■『北京週報』表紙
1920年代に、清水はこの雑誌(北京で刊行)に頻繁に寄稿した。



■倉敷紡績の大原孫三郎社長
清水夫妻のアメリカ留学を費用面で援助。崇貞学園にも多額の寄付をした。



■清水安三『支那の新人と黎明運動』(上)、『支那の新人』(下)
両書とも、当時の中国事情を紹介。吉野作造が「序」を寄せた。(ともに大阪屋号書店、1924年)



■西陣教会にて
清水は1920年代後半に西陣教会で牧師をつとめた。前列中央が安三、前から3列目左端が美穂。



■清水の留学当時のオーバリン教会を描いた絵葉書
(『日米交流史における清水安三と郁子』所収)

I-1

学園創立者 清水安三・美穂・郁子
清水安三

崇貞学園の発展とともに

清水安三・美穂夫妻がアメリカ留学から中国に戻った頃、彼らが設立した学校は、必ずしも順調な発展を遂げていたわけではなかった。その一因は、経済恐慌などもあって寄付金の集まりがはかばかしくなくなったことにあり、清水は1927年に日本に拠点を移し、母校の同志社大学などで講師をしたりして資金調達につとめた。1933年に至り、近江兄弟社の後援を得て中国にもどることが可能になったまさにその年、学校の発展に力を尽くしていた美穂夫人が病没した。

1935年、安三はオーバリン大学でともに学んだ小泉郁子と再婚し、ともに学校の発展に尽力することになった。ときは日中戦争の頃、学校への寄付金も集まるようになり、学校規模の拡大が可能となった。安三の著作『朝陽門外』(1939年)などはよく売れ、安三は寄付を求めてハワイからアメリカまで足を伸ばした。戦争がアジア・太平洋に広がった時代、北京での学校経営は続いていた。



■清水安三著『朝陽門外』表紙 (1939年)

この清水の自伝(朝日新聞社刊)は4部構成で、その第1部は、「戦火を越ゆるもの」と題され、盧溝橋事件(1937年7月7日)直後の北京で、日中間の軍事衝突を回避しようと奔走した清水の姿をなまなましく描いた。当時この本は、ベストセラーになった。

■北京朝陽門 (1939年)

崇貞学園近くの朝陽門。城壁で囲まれていた北京の門の一つ。(『朝陽門外』グラビアから)



■清水安三著『姑娘の父母』表紙 (1939年)

版元の改造社は、当時は有名出版社で、影響力も大きかった。



■清水安三 (1939年)
(『朝陽門外』グラビアから)



■清水の家族5人 (1938年頃)
左から、清水安三、泰、郁子、星子、畏三。



■賀川豊彦・清水安三対談会

両者の対談記事が『週刊朝日』(1939年4月16日号)に掲載された。



■北京中央公園で (1938年)

向かって右から調正路、1人おいて清水夫妻・松本恵子(『大陸の聖女』著者)・池田鮮(牧師)。



■『読売新聞』での清水紹介

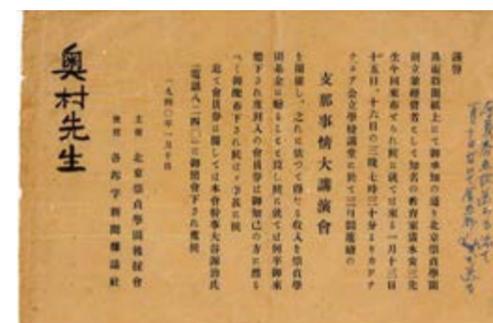
(1939年2月22日付夕刊)
清水の伝記である上泉秀信『愛の伝道者』の英訳刊行を伝える記事。



■清水のハワイ到着を告げる『日布時事』

『日布時事』は、ハワイの有力な日本語新聞であった。社長は、清水と親交のあった相賀安太郎。清水は、アメリカ留学からの帰途、ハワイに滞在し、60本ほどの論説記事などを書いた。また、1940年初め、アメリカに寄付金集めに向かう前、ハワイに立ち寄り、「支那事変問答」(17回連載)などを寄稿し、これは英語版も掲載された。この記事(1940年1月5日付)では「北京の聖者」と謳われる清水、と紹介されている。

(フーヴァー研究所ライブラリー&アーカイブス「邦字新聞デジタル・コレクション」提供)



■ハワイ講演会ピラ (1940年)

渡米の途上、ハワイで公演を重ねた。奥村多喜衛はハワイのマキキ聖城キリスト教会を創設した牧師。同志社の先輩に当たる。(マキキ聖城キリスト教会所蔵)

戦後の清水安三

1945年8月15日、日本は敗戦の時を迎えた。北京にあった崇貞学園は、中華民国政府に接收され、北京での学校運営の継続が不可能となった。1946年3月、清水夫妻は日本に帰国するや、東京に向かった。賀川豊彦のあっせんや、東京・町田の地に校舎として活用できる建物を入手でき、同年5月には、桜美林学園の開設にこぎつけた。

敗戦後の日本で学校を運営して行くには多大な困難がともなったけれども、「せん方尽くれども、希望を失わず」の精神を堅持し、寄付金集めの伝道旅行を重ねた。また、学園の規模もまだ小さかった時代にも、教職員や学生たちとともに、学園の維持・発展に力を尽くし、四年制大学の認可にまで至った。

清水は、1968年にオーバリン大学から、75年に同志社大学から、それぞれ名誉博士号を授与された。それは、崇貞学園以来の教育活動が評価された証しであろう。また、『キリスト新聞』に『起きろ石ころ』を連載し、その教育活動を軸に、生涯を回想した。



■ 伝道旅行姿の清水安三 (1950年前後)

清水は、自著『希望を失わず』を携え、関東各地から関西四国などまで、学園への寄付金集めのため講演に奔走した。売上金は当初、短大昇格の際に活用された(学園誌『復活の丘』創刊号参照)。



■ ハワイで募金作業中の清水

安三は1951年から学園の募金キャンペーンのため、アメリカやブラジルへの旅行に向かい、1952年には、郁子も渡米し、講演・募金活動をおこなった。1953年帰国。



■ 『希望 (のぞみ) を失わず』(1948年刊)

「続朝陽門外」という副題をもつこの本は版を重ね、1951年には改訂第5版が出たが、それは清水による講演・募金活動の活発さを物語る。

■ 旧校舎全景 (1947年頃か)

陸軍の寄宿舎として片倉組が建てたこの建物が、新生の桜美林学園の校舎などに転用された。46頁参照。



■ 引上げ当時の扮装 (運動会。1960年頃か)

学内運動会に、安三・郁子は中国からの引き揚げ時の姿に扮して登場。



■ 教職員研修会 (1960年代前半か)

桜美林学園教職員数はまだ多くなかった半面、教職員間の交流は親密だった。最前列左から2人目郁子、3人目安三。



■ 名誉神学博士号を授与

1968年6月1日、清水はオーバリン大学から名誉神学博士号を授与される。



■ 同志社大学名誉博士号を授与される

1975年。戦前に同志社講師を不本意に辞したので名誉博士号授与を喜んだ。写真の左側は美穂の記念碑。



■ 桜美林大学内の清水安三歌碑「夢」

新島襄を尊敬していた清水は、中国に渡った当初から大学設立の夢をいだき、後年その実現を歌に残した(9頁・137頁参照)。



■ 『キリスト新聞』連載の『起きろ石ころ』

1965年7月から150回ほどの連載。1969年4月26日の最終回の記事では経済学部への認可にふれている。(キリスト新聞社提供)



■ 晩年の清水安三

1988年1月17日没。享年96。